

メダルの価値は誰のもの

地球に生命が最初に誕生したのは38億年前であり、それは海の中で起こった。地上には強い紫外線が降り注ぎ、火山活動は活発で、陸上に生物が生存するには厳しすぎる環境であったが、それを解決したのがオゾン層(図1)であった。

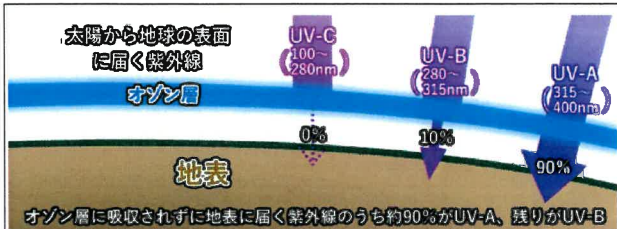


図1. 地球への紫外線を防ぐオゾン層

陸上が安全になると生物は次々と上陸を始め、緑藻類が最初に上陸した。陸上は光合成に必要な光が溢れていることから植物は進化し繁栄を始めた。

生物が増殖する方法として、1つの個体が2つに分裂する無性生殖と、オスとメスが交配する有性生殖があるが、地球で最初に誕生した生物は、すべて無性生殖であった。ある個体が単独で新しい子孫を残す無性生殖では、有性生殖の2倍の速さで増殖できるため、多くの子孫を残す上で有利であるが、地球上には有性生殖をする生物が無数に存在する。

有性生殖には弱点があるのにも拘わらず、生物は進化の過程で有性生殖という戦略を獲得してきた。この戦略を「有性生殖のパラドックス」と呼ぶ(図2)。

勝者が敗者より優秀であり続けるためには、現状に留まらずに、一層の能力を獲得するために進み続けなければならない。無性生殖よりもコストがかかるにも拘わらず、有性生殖が選択される理由は、絶えず新しい組合せの遺伝子を作ることによって、進化の速い細菌・ウイルス・寄生虫に対抗し続けなければならないという「赤の女王仮説」(図3)である。

いま、各々10名の男女がいる。各々の男女には優劣が

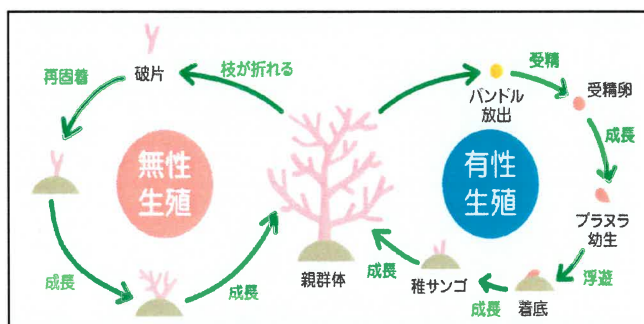


図2. 無性生殖と有性生殖



図3. 鏡の国のアリス「赤の女王仮説」

あり、上位のNo.1～下位のNo.10の男女に順列が生まれるが、一体、どんなカップルの組合せ(図4)ができるのか。

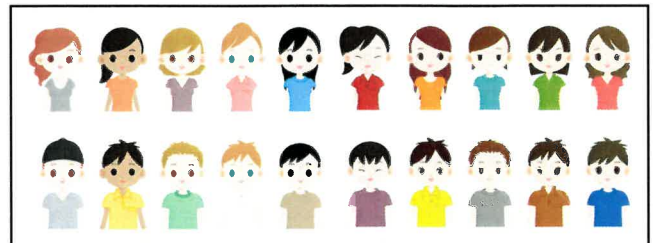


図4. 男女間のカップル成立の法則

理想的に言えば、男女各々No.1から順にカップルとなり、順に男女各々No.2、No.3…と順に、最下位のNo.10のカップルと、10組のカップルが成立するように思えるが、現実にはそのようなカップルは成立しない。では現実はどうなるのか?

それは、上位のNo.1～No.3の男に、女10人がカップルになりたいと希望するというのが結論である。なぜなら有性生殖のカギを握っているのは女であり、優秀な遺伝子を取り入れ、様々な環境に適応できる子孫を確保しなければならない宿命があるからである。

では、上位のNo.1～No.3の男に選ばれなかった女はどのような選択をするのか。それは多くの場合、No.4以降の男とカップルとなることを希望せずに、自立する道を選ぶのである。

結局、上位3位までの男はモテモテとなり、No.4以降の男は女から選ばれることなく、無性生殖を選んだ女も蔓延することになるが、そこで「結婚制度」というシステムが誕生する。

人類では、その歴史の大半において一夫多妻制であった。

縄文人の平均寿命は15才で、夫が死んでしまった場合、女は早急に新しいパートナーを見つけなければ生きていけなかった。現代でも世界中の約80%の

国々が一夫多妻制であり、一夫一婦制という婚姻形態は世界のスタンダードではない。実際、完全な一夫一婦制なのは先進国だけに限られ、大半がキリスト教圏である。その理由は、一夫一婦制は、貧困な国では成立しない仕組みだからである。

一夫一婦制というのは、子供の父親を特定する制度なため、父親に扶養義務を課せられるため、必然的に子供の死亡率は低くなる。

生物の生存競争において、目安となるのはオスの体形である。子孫繁栄のために、オスは戦いでライバルに勝たなければならないため、体形を大きく進化させてきた。ヒトのメスが高身長な男を選び好みするのも、より優れた遺伝子を取り入れるための戦略として受け継がれている(図5)。

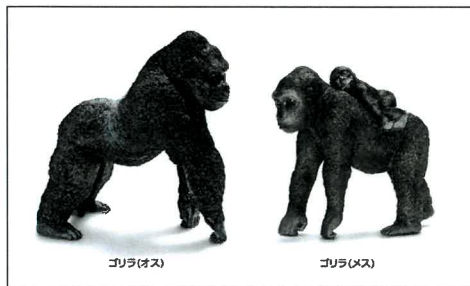


図5. 動物におけるオス・メスの体格差

一夫一婦制では、子供にしっかりとした食事や教育を与えることができ、国民全体の幸福度も上がり、戦争も激減する。

一夫一婦制を概言すれば「すべての男に奥さんを用意する」という制度であり、年収や男の資力とは無関係に、男は1人の女としか結婚できないことになる。したがって、一夫一婦制は一般庶民に有利な制度、一夫多妻制はお金持ちに有利な制度で、一夫一婦制では大半の男が結婚して家庭を持ち、保守的になるため、必然的に犯罪率も低下する。

しかし、いつの時代も優れた男が複数の女を確保するため、生涯未婚率は男の方が高く、実力のある男は既婚者を問わず、多くの女性を獲得できるのは魅力的でない未婚者と付き合うより、魅力のある既婚男を選択する女の存在があるからである。

男が女に対して魅力的だと感じる割合は10%ほどなのに対し、女が男に魅力的だと感じる割合は僅か2%と少なく、イイ男に比べイイ女が5倍もいることになり、二股されるのは必然的な結果である。

一夫一婦制で得をするのは一夫多妻制の国なら絶対に結婚できない負け組の男であり、女は妥協の上で結婚する。貧困な国では“妥協して無能な男と結婚する位なら妻が100人いる王様の方がマシ”と考える

女がいても不思議なことではない。

元来、ヒトのメスは、生物界一異性を選び好みする生き物で、その厳しいお眼鏡に適ったオスだけを受け入れてきた歴史がある(図6)。だからこそ、人類はここまで急速に進化し、地球上の王者に君臨することができたのであり、もし人類の基本形態が一夫一婦制のままだったら、我々は依然、木の上でサルと同じような生活をしていただろう。



図6. 伴侶を選択するのは女

極端な一夫多妻制社会では、生まれながら裕福か、成功者でなければ結婚できないため、多くの負け組は一発逆転を狙って大きな賭に出て「IS国」など悪しき集団が次々と形成されていく。そこでは、世の中に不満を抱く男が大半となるため、革命やクーデターも頻発し、貨幣価値が不安定となり経済も発展しないのである(図7)。



図7. 「イスラム国 (IS)」

1898年まで日本も一夫多妻婚が認められていたが、キリスト教の宣教師により人権思想・男女同権の思想が日本に流布した結果、一夫一婦制が急遽、制定された。最近では晩婚化だけでなく、生涯結婚しない男女が増えているが、結婚制度は既に時代に合致しなくなったともいえる。1人の夫の配偶者のみの犠牲を前提とした制度が継続するはずもなく、結婚制度の賞味期限が切れてしまったのである。

国の繁栄が永遠に継続するためには、男女の優劣順が、永遠に同列順で担保されることはなく、平和や安息を維持するためには、「金・銀・銅」の上位3番目に表彰されるように、熾烈な順位争いが必然となるのである。